

マクリーズィー著

エジプト誌草稿本

佐藤 次高

周知のように、マクリーズィー Taqī al-Dīn Aḥmad b. ‘Alī al-Maqrīzī (766頃～845/1364頃～1442年)は、マムルーク朝時代を代表するナイルの歴史家である。スルタン・シャーバーン二世(在位1363～77年)治下のカイロに生まれ、マムルーク軍閥の抗争やペストの流行によるエジプト社会の混乱と経済の危機を身をもって体験した。先人の著書からの引用(naql)、古老から収集した情報(riwāya)、自らの体験(mashāhid)を区別した歴史記述をおこない、イスラーム史の全体を眺めてみても、社会変容の実態をきわめて具体的に記している点で、他の歴史家の追隨を許さない存在であるといえよう。

イスラーム社会の習慣に従い、マクリーズィーは「コーラン」の暗誦を終えると、叔父をはじめとする当時有数の諸学者に師事して法学、伝承学、文法学、歴史学などのイスラーム諸学を修め、さらにメッカへ遊学して勉学をつづけた。1382年、イブン・ハルドゥーン(1332～1406年)がマグリブ地方からエジプトに来住し、アズハル・モスクで講演すると、20歳頃のマクリーズィーも聴講者の列に加わり、『歴史序説』の著者の講説に大きな感銘を受けたと伝えられる。これ以後、マクリーズィーはイブン・ハルドゥーンに直接師事して歴史学の手ほどきを受け、歴史事象を体系的に叙述する方法を身につけることができた。

マクリーズィーは、最初の仕事である政府の公文書係をへて、1399年、30歳の頃にカイロの市場をとりしきるヒスバ長官に抜擢された。ヒスバ長官には都合三度就任するが、これらの体験がマムルーク朝治下の経済生活を理解するうえで大きく役だったことは疑いない。カイロでは、この他にエジプト最古のアムル・モスクやハサン学院の説教師を務め、次いでハーキム・モスクのイマーム(礼拝の指導者)に選任された。1407/8年にシリアのダマスクスへ赴き、ヌーリー病院の管理をするかたわら、アシュラフィーヤ学院やイクバーリーヤ学院で歴史学や伝承学を講じたことが知られている。1417年、約10年ぶりにカイロへ戻ったマクリーズィーは、すべての公務を退いて念願の歴史研究に専念し、以後25年間は、必要がなければめったに人を訪ねるこ

ともなかったという。1442年、78歳の高齢で病没し、ナスル門外の墓地に葬られた。

マクリーズィーの名を不朽にしたのは、やはり「歴史記述に優れている」という資質であった。その著作は地誌、年代記、伝記のほか、政治・社会・経済に係わるテーマ史など多岐にわたるが、主著としては『地誌と遺跡の叙述による警告と省察の書』*Kitāb al-Mawā'iz wal-I'tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār* (通称『エジプト誌』*Khiṭaṭ*) と『諸王朝の知識の旅』*Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifat Duwal al-Mulūk* の二つをあげることができよう。『諸王朝の知識の旅』は、死の前年(844/1441年)まで書きつがれたアイユブ朝とマムルーク朝の年代記である。イスラーム世界の年代記が、概して王侯の宮廷生活や戦闘の記述に終始しているのに対して、マクリーズィーの年代記には、危機の時代を生きた歴史家にふさわしく、エジプト・シリア経済の変容や都市生活の風俗・習慣についての記述が豊富に含まれている。

一方の『エジプト誌』は、イスラーム初期の時代からエジプトに伝えられてきた歴史と地誌の集大成である。その「序文」によれば、全体は次のような7部から構成される予定であった。すなわち、第1部「エジプトの地理・ナイルの状態・租税・山岳地帯」、第2部「諸都市と住民の情報」、第3部「フスタートとその支配者たち」、第4部「カイロの情報・歴代カリフおよび遺跡」、第5部「カイロとその郊外の状態」、第6部「城塞とその支配者たち」、そして第7部「エジプトの荒廃をもたらした諸原因」である。しかし、なぜか最後の第7部に相当する記述は『エジプト誌』のなかには見あたらない。その内容から判断すれば、1404年、ペストの大流行を機に執筆された『災禍を取り除くことによるエジプト社会救済の書』*Kitāb Ighāthat al-Umma bi-Kashf al-Ghumma* が、『エジプト誌』の第7部にあたるが、このように分離して書かれた理由は不明である。

いずれにせよ、『エジプト誌』がイスラーム時代のエジプト社会、特に旧都フスタートと新都カイロの歴史を明らかにするうえで第一級の史料であることに異論はないであろう。現在、世界各地の図書館に170種類もの写本が保管されていることは、マクリーズィーの『エジプト誌』が早くからムスリム知識人の注目を集め、アラブ世界以外でも広く読まれたことを示している。しかし現代の研究者がもっぱら利用する刊本は、1270/1853年にカイロ郊外のプーラクで印刷され、1970年にバグダードで復刻された2巻本であり、これには校訂の誤りも少なからず含まれている。最良の刊本は1911年から刊行がはじまったガストン・ヴィエトの校訂本であるとされているが、残念ながら全体の半ばに達する前に、1927年の刊行(第5巻)をもって中断されてしまった。

このように『エジプト誌』については、重要な史料であるだけに、さらに良質の校訂本を出版し、『エジプト誌』そのものについても書誌的研究を深めていくことが必要であろう。その意味で、ここに紹介するマクリーズイーの『エジプト誌草稿本』、つまりその下書き *Musawwadat Kitāb al-Mawā'iz wal-I'tibār fi Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār* は、『エジプト誌』研究のための格好な材料を提供するものと思われる。写本はイスタンブルのトプカプ宮殿図書館に所蔵され（写本番号1472）、1947年にそのマイクロフィルムがカイロのアラブ写本研究所にもたらされた。この写本コピーを詳しく研究したアイマン・フアード・サイイドは、1977年、この草稿本がマクリーズイー自身による『エジプト誌草稿本』の手書き写本であることを確かめ、1995年にロンドンのフルカーン・イスラーム遺産財団から出版したのである。

本書の全体は600頁余に及ぶ大冊であるが、序文として校訂者による100頁余りのエジプト地誌研究が収められている。その記述は、エジプトにおける地誌の伝統と関係の著作にはじまり、著者マクリーズイーの経歴と著作、『エジプト誌』の執筆にあたりマクリーズイーが依拠したさまざまな著作、『エジプト誌』の刊本とその研究史、さらに索引の刊行や本書校訂の方針にまで及ぶ。マクリーズイーとその著作については、これまでもさまざまな研究論文が発表されてきたが、本書に収められたマクリーズイー研究は、これら諸研究のなかでもっとも優れたものといつてよいであろう。

今回刊行された草稿本の写本は179葉からなり、校訂者はマクリーズイーがこの草稿を仕上げたのは、818/1415年から827/1424年の間であろうと推定している。これが正しいとすれば、著者51歳から60歳頃のことであり、マクリーズイーは、1417年にダマスカスからカイロへ帰還した後、この草稿をもとに本格的な『エジプト誌』の執筆を開始したことになる。おそらく年代記『諸王朝の知識の旅』を書き継ぎながら、『エジプト誌』の加筆・訂正を進めていったのであろう。前述したプーラク版の奥書には、『エジプト誌』が完成した年代は記されていない。『エジプト誌』（プーラク版）のなかには、マクリーズイーの死後に登場するスルタン・カーイトバイ（在位1468～96）についての記述があり、後世の写本作成者が独自に加筆したことは明らかなので、その執筆年代を正確に定めることはむずかしいのが現状である。

草稿本の写本（179葉）は、「序文」（8葉）と「第2部」（171葉）からなる。第1葉の表には、書名が『地誌と遺跡の叙述における警告と省察の書』*Kitāb al-Mawā'iz wal-I'tibār fi Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār* と記されているが、プーラク版では「地誌と遺跡の叙述による」*bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār* と改められている。むろん意味のうえでの違いはほとんどないが、いま私の手元にある3種の『エジプト誌』写本では、いずれも草稿本と同じ

「叙述における」が用いられている (Bibliothèque National, Arabe 1737, 1747; Bodleian Library, Orient 317)。前述したヴィエト版も同様である。ブーラク版の校訂者が用いた写本が明記されていないので断定はできないが、今のところマクリーズィーが確定した書名は、この草稿本の通りであった可能性が強いといえよう。

次に「序文」について、草稿本とブーラク版とを比べてみると、幾つかの語句の入れ替えはあるものの、両者の記述内容と叙述の順序はほとんど同じである。例えば、「先達の知識人たちは、書物の冒頭に次のような8項目を記すのを習慣にしてきた。すなわち、執筆の目的 (ghard)、書名 ('unwān)、書物の効用 (manfa'a)、引用と合理的解釈の方法 (martaba)、内容の信憑性 (ṣiḥḥat al-kitāb)、どの学問分野に属するか (min ayy ṣinā'a)、何部構成か (kam fih min al-ajzā'),そして典拠となる史料の種類 (ayy anḥā' al-ta'lim) である」の一節は、一字一句として異ならない。マクリーズィーも、「序文」のなかで、この慣例に従ってこれらの8項目を順次説明していく。草稿本の校訂者が述べるように、この「序文」はその内容をほぼ確定した「清書原稿」であったとみてよいであろう。なお、ブーラク版での語句の入れ替えは校訂者によって脚注に示されているが、草稿本とブーラク版の間には、それ以外にもまだ幾つかの小さな違いが認められる。

また、『エジプト誌』が7部から構成されることについても、草稿本とブーラク版の間に違いはない。双方の「序文」とも、『エジプト誌』第2部のテーマを「諸都市と住民の情報」と記している。しかし草稿本の大半を占める「第2部」の内容は、目次に示されたこのような第2部のテーマとはかなり異なっている。具体的にいえば、草稿本第2部の見出し項目は、「現代のフスタートの記述」(校訂者によって巻末から冒頭に移動された)、「カイロの範囲」、「カイロについての記述」、「ファーティマ朝時代のカイロ」、「宮殿内外の図書館と武器庫」、「政府の諸機関」、「カイロと郊外の街区(ハーラ)および地区(ヒタト)」などである。これらは、編別構成中の第3部「フスタートとその支配者たち」の冒頭、第4部「カイロの情報・歴代カリフおよび遺跡」、それに第5部「カイロとその郊外の状態」にほぼ相当するといえよう。つまり、「序文」を除く草稿本の大半は、マムルーク朝の首都カイロについての記述によって占められていたことになる。ブーラク版では、第1巻の342頁から第2巻の76頁までの記述に相当し、これは『エジプト誌』全体の2割強を占めるにすぎない。これ以外の草稿が存在していたのかどうかは不明であるが、仮にこれがすべてであるとすれば、マクリーズィーはまづもっとも重要なカイロについてその下書きを準備したものと思われる。

それでは、本文の中心を占めるカイロの記述について、草稿本とブーラ

ク版とではどの程度の違いがみられるのだろうか。両者を比べてみると、「序文」とは異なり、本文では随所に大幅な加筆がなされていることに気づく。マクリーズイーが生まれ育ったバルジャワーン街区を例にとりあげて説明してみよう。ともに長い記述なので、冒頭の部分だけを比較すれば、まずと草稿本には次のように記されている。

バルジャワーン街区は、バルジャワーンに由来する。イブン・アブド・アッザーヒルという。「バルジャワーン街区は宦官のバルジャワーンに由来するが、彼はカリフ・ハーキムによって『守衛』（ワズウ）と名付けられた。バルジャワーンはカリフ・アズィーズ時代の宮廷の宦官としてカリフの信頼を得ていた。アズィーズが死んだとき、彼は息子のハーキムにバルジャワーンのことを託した。その結果、バルジャワーンは富を蓄え、権勢を増大したので、389/999年、ハーキムは彼を処刑した。バルジャワーンは数え切れないほどの現金や資産を残した。遺産のなかには、各1000本ずつのダビーキー織りズボンと絹の帯などが含まれていたという」（360-361頁）。

これに相当するブーラーク版の記述は、次のようである。

バルジャワーン街区は、宦官のウスターズ・アブー・アルフトーフ・バルジャワーンに由来する。彼は白人の宦官であり、完璧な性格を備えていた。カリフ・アズィーズの宮廷で育ち、やがて宮廷の諸事を任されるにいたった。死の床に就いたとき、アズィーズは息子のアミール・アブー・アリー・マンスール（後のハーキム）にバルジャワーンのことを託した。アズィーズが死ぬと、マンスールがカリフに就任し、アブー・ムハンマド・アルハサン・ブン・アンマール・アルクターミーが国政を担当した。しかしバルジャワーンは、イブン・アンマールの財産を没収し、軍団を私して前任者をおい落とした。こうしてバルジャワーンは、387年ラマダーン月27日金曜日に権力を握り、カリフ・ハーキムと民衆との仲介者の立場を獲得した。彼は奴隷兵（ギルマーン）を集め、彼らには〔イブン・アンマール側の〕クターミーやマガリバ集団との接触を禁止した。（中略）バルジャワーンが仲介者として権力を握っていたのは、2年8カ月に1日足りない期間であった。ハーキムは、彼の遺産のなかに、100本の豪華な色つきターバン、1000本のダビーキー織りズボン、1000本のアルメニア産絹帯、3万3000ディーナールに及ぶ金銀などを発見した（第1巻3-4頁）。

両者の記述の相違は一見して明らかであろう。草稿本では、イブン・アブド・アッザーヒル（1292年没）の『カイロの地誌にかんする花開く庭園』*al-Rawḍat al-Bahiyat al-Zāhira fi Kḥiṭaṭ al-Mu'izziyat al-Qāhira*（現在は散佚して伝わらない）からの引用が大半を占めていた。これに対してブーラク版では、これ以外の史料を加えてはるかに詳しい記述内容となっている。増補された史料名は明記されていないが、それらを逐一示すことは煩雑に過ぎると考えたのであろう。

この一例からも知られるように、マクリーズイーは、草稿本を書くにあたって利用した史料以外の新史料を多数用いて完成原稿の作成を進めていった。他の項目を取り上げて両者を比較すれば、マクリーズイーによる加筆・訂正の過程をさらに具体的な形で明らかにすることができるはずである。これは、マクリーズイーの『エジプト誌』執筆の考え方や方法について、より深い理解に到達するための最良の道であろう。その意味で、草稿本の校訂と出版は、歴史家マクリーズイーと『エジプト誌』の研究者にとっては、なかなか魅力的で、しかも意義ある仕事といわなければならない。

(Taqī al-Dīn Aḥmad b. 'Alī b. 'Abd al-Qādir al-Maqrīzī, *Musawwadat Kitāb al-Mawā'iz wal-I'tibār fi Dhikr al-Kḥiṭaṭ wal-Āthār*, ed. Ayman Fu'ād Sayyid, London, Mu'assasat al-Furqān lil-Turāth al-Islāmī, 1416/1995, 106+32+534+5 p.)